

「少女」が「推理小説」を読む時
——戦後のジュニア向け翻訳推理叢書にみる「読書」への期待——

佐藤 宗子
千葉大学・教育学部

Expected Benefit of Reading Mystery :
On the Post-War Popularity of Mystery Series for Young Girls

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九五〇年代から七〇年代にかけて、児童文学の世界では「少女」を多くを対象読者として刊行された翻訳叢書が相当数見られる。その中の一つ、金の星社刊の「少女・世界推理名作選集」に焦点をあて、読者層が「少女」と設定されていることと、ジャンルが「推理小説」であることの双方を検討の対象とした。監修者や訳者、出版社側の、媒介者を想定した推薦文や解説の文言に注目し、さらにウールリッチ『黒衣の花嫁』の収録に目を向けることで、その時代における「読書」への期待の実態の一端を、明らかにした。

キーワード：児童文学 (Children's literature) 翻訳 (translation) 少女 (girls) 推理小説 (mystery) 読書 (reading)

一

一九五〇年代から七〇年代を中心に、とくに「少女」向けと銘打った翻訳・再話の叢書が、いくつもの出版社から相次いで刊行されていたこと、またそれらには戦後の「啓蒙」「教化」の観点からの出版という色合いが濃く見られることについては、すでに小論「少女名作」という発想——戦後の再話叢書の一側面——(『千葉大学教育学部研究紀要』第五四巻、二〇〇六)ですでに指摘した。その中で、存在について触れたのみとなった一叢書に、金の星社刊の「少女・世界推理名作選集」がある。一九六〇年代に刊行された全三〇巻のシリーズであり、判明しているところでは八〇年代まで刊行が継続されている。

第二次大戦後に出版された推理小説関係の翻訳叢書をざっと眺めても、「少年少

女」双方またはそれに類する「ジュニア」などの対象年齢を冠称に入れるか、あるいはまったく入れないかのどちらかである。この叢書が、あえて「少女」を冠した名称を付したのは、どのような理由があると考えられるだろうか。その場合、前述の小論で検証した「少女」読者意識とのかかわりが見られるのではないか。さらに、それが「推理小説」ジャンルであることにも、何らかの意味が認められるのではないか。

こうした問題意識に沿って、今回の検討を進めていくこととしたい。手順としては、まず戦後のジュニア向け翻訳推理叢書について、多少の概観を得るところから始め、次に当該の金の星社の叢書について、書目や訳者の意識に焦点を絞って特徴を捉える。そして、その中で注目を引く作品、すなわちウールリッチ『黒衣の花嫁』について、他の翻訳をも参照して問題の在り処を指摘し、それらを通して、「少女」

が「推理小説」を読むことに何が期待されていたのか、それを追究することとした。なお、本稿では「少女」を特出させて論じていく都合上、一般的な対象年齢表記としての「少年」を用いると混乱が生ずる恐れがある。そのため、そうした少年少女を指す語として、以下、「ジュニア」を使用する。また、大阪国際児童文学館、国際子ども図書館などで実物にあたるように、それもなるべく初版にあたるように、努めているが、この時期のこうした翻訳叢書の収蔵状況から、確実な刊行点数や刊行時期を特定しづらいものも少なくない。本稿では、全体状況を概括するなかから問題点の抽出を図っているため、そうした書誌的把握の詳細な確認は、後日に帰すこととした。

二

日本のジュニア向け推理小説の代表者といえば、周知のように、江戸川乱歩の名がまず挙げられよう。戦前に書かれた「怪人二十面相」のシリーズは、戦後もさらに書き継がれ、人気を博していくが、乱歩のこの分野への寄与は、それだけにとどまらない。翻訳叢書の刊行に関しても、一役買っている。

たとえば一九五七年から刊行された講談社の「少年少女世界探偵小説全集」全二巻では、久米元一、西条八十とともに監修者に名を連ねるのみならず、全巻の解説をすべて彼が担当し、カー『動く人形のなぞ』(二巻)、ミルン『赤い館の怪事件』(一二巻)、フリーマン『名探偵ソーンダイク』(一七巻)の訳出も手がけている。この叢書には、もともとジュニア向けと一般向けあわせて四冊のクイーン作品、クリスチー、ヴァン・ダイン、ピガーズが各二冊、ほかにドイル、クロフツ、アイリッシュ、ガードナー(表記のまま)など、さまざまな作家の作品を選択していることがわかる。

ほかにも、私が直接確認できたものとして、「世界推理科学名作全集」(一九六二年刊行開始、偕成社、広告によれば全二〇巻)およびその後身と思われる「世界科学・探偵小説全集」(一九六四年刊行開始か、偕成社、広告によれば全二四巻)でも、木々高太郎、東大教授・理学博士の肩書きを付した畑中武夫とともに、監修者となっている。こちらは、ドイルのホームズもの、ルブランのルパンものがそれぞれ四冊ずつ収録されているほか、「科学もの」としてSF作品も五点ほど入っている。それでもルルー、ポー、クリステイー、カー、ウールリッチ、クロフツ、フィ

ルポツ、バンダイン(表記のまま)と、錚々たるメンバーの作品が選定されており、長さの短縮などジュニア向けに訳出上の配慮はあるにせよ、右の全集同様、そもそも一般向けの推理小説が収録候補となっていることは明らかである。

だが、ここで気になるのは、これらの書籍が読者の手に渡る段階でいかなる意味づけをされているか、という点である。というのも、どちらの全集も、カバー袖の推薦の辞や、刊行のことば、あるいは広告の文言などに、これらの書物を「読書」することの意義が、きわめて強い調子で述べられているのである。

講談社の「少年少女世界」では、カバーの両袖部分にそれぞれ、「推理小説の魅力」「世界探偵小説全集によせて」と題して、前者は国立国会図書館長・金森徳次郎の、後者は全日本中学校長会長／東京都深川第二中学校長・龍沢良芳の推薦文が載せられている。金森は、「このはげしい競争の時代に、活気を有する人たちが探偵小説に読みふける」状況を指摘し、そこから「探偵小説はとくに適量とよい品質のものを読むようにする必要」を説き、それに該当する「名作」を読めば「世の活機に通じ、好奇心を満足させ、世務に対する能力を養う」とした上で、本全集収録作がそうした名品であると推奨する。龍沢は、世界的な推理小説ブームを指摘した上で、「のびゆく子どもたちが、わきあがる探究心をはたらかし、複雑に構成された物語のはこびを追って、推理の帰結をつかもうとする努力は、かならずやあらゆる生活の面に、新しい力となって、生まれてくるもの」との信念を吐露する。他方、偕成社の「世界科学」では、「刊行のことば」のなかに、「少年少女時代に、推理小説を読むことは、興味のうちには探究心を養い、理知の発達をうながします。科学小説は、豊かな空想力を伸ばすと同時に、勇氣と科学心をつちかいます。この点から、少年少女がこの種のすぐれた作品に接することは、心の成長に役立つものと信じ」るとある。また、奥付の後ろに掲載された広告ページの中には、二本の推薦の辞——東京工大教授／工学博士・桶谷繁雄「優れた推理小説」と日本宇宙旅行協会理事長・原田三夫「科学への興味を培う本」——がある。短いので全文をあげると、桶谷は「探偵小説は、とくに内容の優れたものを読むことが大切です。この全集は、定評ある名作ぞろいので、親しみやすく紹介してある点、大きな特色といえるでしょう。」と述べ、原田は「人工衛星うちあげ以来、科学小説が若い人々に読まれるようになったことは喜ばしい。この全集は、私の念願をみたしてくれるものとして、心からおすすしたい。」と言う。

二つの全集に付属するこれらの文章では、一九六〇年前後の時代状況を意識した上で、内容の優れた名作であれば、推理小説を読むことが読者である子どもの理知的能力を高め、また現実世界の対応にもよい効果がある、としている。すなわち、実利的な「読書」の効用を強く訴えかけることで、このジャンルの存在意義が認められているのである。

こうした傾向は、ほかの叢書にも見受けられる。中には興味深い薦め方をしている例もある。前述の講談社の叢書と同年に刊行された保育社「保育社の探偵冒険全集」（広告によれば全二五巻）では、たとえば第一巻フランクリン・デイクスン『古塔の宝』（酒井朝彦訳）を取り上げてみるが、「この全集をおすすめすることば」を、村岡花子が三ページにわたり執筆している。やや細くなるが、村岡の文章から重要と思われる点を抜き出していこう。

「この頃、どこのご家庭でも、子供さんたちに与える書物のことでは、父兄のかたたちがずいぶん頭をなやましておいでになることと思います。」とはじめられる文章は、呼びかける対象や敬語の使用法からいって、児童書の第一の顧客たる保護者——第二の顧客が子ども読者となる——に向けたものであることは明らかである。彼女によれば、「興味中心の探偵読物」なので「新しい科学知識とか、芸術的感興とかを求めるのは無理」だが、「良書の一つの条件」としうる「道徳的感情を高める」ことには該当する、と言うのである。すなわち、「たとい力はなくとも、正義を愛する心が、最後には、よこしまなもの、悪い心に打ち勝つ」ということを、「伸びゆく若い魂に、しっかりと植えつけるのに、この本はたいへん役立つ」。主人公の少年少女たちが「決してよそからの助けをあてにしないで、自分の力で闘い」、しかも「どこまでも、信じてるところを貫き通すという、強い実行力を持つてい」る点から、「将来どんな道に進もうとも、ともに生きてゆく人々への愛と、困難に打ち勝つ努力とをもって、よく注意して物事に当たれば、きっと成功する」ことを、読者は、「自然にこの本の中から会得」するはず、という。さらに、「物事の筋道を立てて考える、推理力が強くなる」利点もある。

実は彼女は、確認できた現物および広告によれば、この全集のうちいずれの巻の翻訳も担当していない。そんな彼女の、三ページにわたり熱く語るおすすめのことばからは、推奨される利点が何であるかと同時に、訳者でもない村岡にそこまで文章を書いてもらうべき必要を感じる児童書出版事情下にあるのが、当時のジュニア

向け「探偵小説」の現状だったことも、受け止めておくべきだろう。

一九六〇年代後半に下っても、こうした推奨のことばをカバー袖に見ることができ。ポプラ社の「ジュニア世界ミステリー」（一九六八年刊行開始、広告によれば全二〇巻）のそこには、本稿の中心に据える金の星社の叢書でも登場する白木茂が、端的に「ミステリーの効用」と題して推薦文を書いている。ミステリーの面白さは、「スリルとサスペンス」と「謎とき」があるからで、また「よい点は、つかれた頭のレクリエーションになると同時に、頭の訓練」あるいは「頭の体操」になる、つまりは「頭のはたらきを養うことができる」。したがって「推理という楽しさを通して、知性と思考力をみがいてもらいたい」というのである。

以上の例を総合すれば、次のようにまとめてみることができよう。推理小説（探偵小説）の翻訳叢書は、一九五〇年代後半から六〇年代にかけて、数社から刊行されているが、それらには概ね訳者以外の、叢書の顧客となるような保護者から信頼される、高い知識を有する著名人の推薦文等を掲げている。そこには、推理小説を読書することの実利的な長所が、道徳的見地からも向目的に捉えうること、理知的な力ないし推理力といったものの養成につながることで、読後の現実対応力が増すことなど、いくつも上げられている。その反面、そのように推薦してもらわなければ、読物として低位に置かれており、時として「いかがわしさ」のイメージも払拭しきれぬものであったことが容易に想像される。

では、そんな中で、特に「少女」だけに限定された叢書は、一体いかなるものであるのか。次に、「少女・世界推理名作選集」の全体像を見ていくことにする。

三

金の星社の「少女・世界推理名作選集」（以下、「選集」と略す）は、一九六二年一月に刊行開始となっている。広告を見る限りでは、好評のためか最初の十巻の予定から途中で巻数を増やしたようで、六六年六月に全三〇巻で完結した。当初は函入だったが、のちハードカバーの本体にカバーがかけられるのみとなる。なお、東京都立多摩図書館所蔵の一九七四年の版は、「カスタム版」の記載があり、図書館側の要請でソフトカバー仕様となっている。また地域の図書館の所蔵などでは、一九七九年の増刷分を相当点数確認できた。さらに、一九八五年に別途単行本として刊行された、同叢書所収作家の一人であるキャロリン・キーンの『ブラックウッド

館の謎』（前田三恵子訳、金の星社）の挟み込み広告によれば、この時点で、同叢書のうちキーン著の「ナンシー・ドルー」シリーズから七冊が、従前の装丁のかたちで注文専用商品として流通していたことがわかる。

このように、この「選集」は叢書全体としても十五年以上、さらにその一部は装丁を変えずに二十年あまりも読み継がれた、長い人気を誇るシリーズであったことがうかがえる。反面、消耗度もはげしかったためか買い替えの結果、大阪国際児童文学館や国際子ども図書館で調査しても、初版をすべて確認することはできない。そのため、初版年月日が不明のものはそれを省略するかたちで、次に書目の一覧をかかげる。

巻数	題名	著者	訳者	解説執筆	初版刊行
一	『少女探偵ナンシー』	キーン	土居 耕	白木 茂	一九六二・一・二〇
二	『秘密の地図』	ブランク	岡上 鈴江	白木 茂	一九六二・一・二〇
三	『六本指の手袋』	ジャッド	土居 耕	〃	一九六二・三・一〇
四	『旅行かばんの秘密』	サットン	塩谷 太郎	〃	一九六二・五・一〇
五	『古い柱時計の秘密』	キーン	谷村まち子	白木 茂	一九六二・五・一〇
六	『ランプの秘密』	キーン	山主 敏子	〃	一九六二・五・一〇
七	『鏡の中の顔』	アレン	村岡みどり	白木 茂	一九六二・九・三〇
八	『海辺の殺人』	クリスチ	野長瀬正夫	白木 茂	一九六二・一〇・三〇
九	『ナンシーの活躍』	キーン	岡上 鈴江	白木 茂	一九六二・八・三〇
一〇	『のろわれた屋敷』	ラインバード	白木 茂	〃	一九六二・一〇・三〇
一一	『学校殺人事件』	ヒルトン	上笙 一郎	〃	一九六三・
一二	『仮装舞踏会の秘密』	ジャッド	土居 耕	〃	五・一五
一三	『深夜の追跡』	アイリツシュ	野長瀬正夫	〃	一九六三・五・三〇
一四	『黒衣の花嫁』	ウールリツチ	伊藤佐喜雄	〃	七・一〇
一五	『緑の屋敷の秘密』	キーン	塩谷 太郎	〃	一九六三・一・一五
一六	『なぞの美少女』	サットン	山主 敏子	〃	一九六三・一・一五
一七	『まぼろしの女』	アイリツシュ	伊藤佐喜雄	〃	一九六四・一・二〇
一八	『ふしぎな山びこ』	ジャッド	岡上 鈴江	白木 茂	一九六四・一・三〇
一九	『少女探偵ジュディ』	サットン	高瀬 嘉男	〃	
二〇	『宝石盗難事件』	キーン	那須田 稔	〃	
二一	『地下室の秘密』	サットン	丹野 節子	〃	一九六四・六・二〇
二二	『少女誘かい事件』	サットン	大蔵 宏之	〃	
二三	『ぬすまれた花嫁衣裳』	サットン	久米 元一	〃	一九六四・七・三〇
二四	『シャドー牧場の秘密』	キーン	土居 耕	〃	一九六四・一二・一五
二五	『ジュディの推理』	サットン	岡上 鈴江	〃	
二六	『あらしの夜の出来事』	キーン	塩谷 太郎	〃	
二七	『白い顔黒い手』	キーン	野長瀬正夫	〃	一九六五・一二・五
二八	『ハワイの冒険』	タサム	丹野 節子	〃	一九六六・一・五
二九	『スチユアデスの活躍』	ウエルズ	大蔵 敏子	〃	一九六六・

三〇『屋根裏の幽霊』

サットン

野長瀬正夫

〃

一九六六・

六・一五

五・三〇

途中で増巻されたシリーズなので、刊行当初の意図とはずれたところもあるかもしれないが、結果から見れば、キーンの「ナンシー・ドル」シリーズが九点、サットンの「ジュディ・ボルトン」シリーズが八点収録されており、この二つの少女探偵もので、過半数を占めていることがわかる。(ジャッドの三点も、少女探偵が登場する。)そこには当然のことながら、想定読者である「少女」への強い思いが反映されていた。巻頭に掲載されている「はじめに」(白木茂)をのぞいてみよう。

白木はそこで、世界がせまくなる「こういう新しい時代に生きる少女のみなさん方」に対し、「現代の感覚を十分にたたえた読物から、この世を生きていく知恵と勇気を学んで」ほしいという。感情に支配されるのではなく、「理知の尊さを知り、推理の力を重んじなければ」ならない、そして「推理小説を読むことは、頭を訓練することになる、抽象的なことに走らずに「具体的なことをいいかげんに」しないよう、「こまかいことに気をつける習慣を作」るし、ひいては「人生の勉強になる」とまでいっているのである。

右の一覧からわかるように、白木は自身で訳出していない巻も含め、計八巻の解説を担当しているが、そこではほかに、「推理小説は、イギリスやアメリカのような、民主主義のもっとも進んだ国にさかん」な、「市民社会の産物」である(二巻解説)とか、ちゃんとした推理小説なら「観察力をまし、想像力をゆたかに」する「健全な文学」である(五巻解説)なども述べている。また、キーンのシリーズに関しては、「現在なお英米の少女たちに愛読されている」魅力の理由として、「ヒロインのナンシーのあかるい性格、するどい頭脳、正義のためにたたかうその勇氣」に読者が共感するからだとし、さらに「どこにもむごたらしさやグロテスクな描写がなく」「さわやかな感銘」が残る点を挙げて(九巻解説)。

他の訳者たちも、ほぼ同様の考えを解説の中で示している。例えば、キーンの「ナンシー」シリーズと並ぶサットン「ジュディ」シリーズの一冊、『旅行かばんの秘密』(四巻)を訳した塩谷太郎はまず、「同じ犯罪小説をあつかう推理小説といっても、おとな向きのものと、少年少女向きのものとのあいだには、しぜんと区別がなければなりません。」という。そしてジュディのシリーズには「殺人やピストル

の撃ちあいなどのような血なまぐさい事件」が出てこないからこそ、「少女向きの読み物としてふさわしいよう」な「少女たちのあかるい生活」とか「うつくしい友情」を書いている点を肯定的に評価するのである。

このような訳者たちの手による作品が世に送り出され始めた時点では、したがって、叢書第五巻初版の後ろに掲載された一ページ広告に見られる通り、「現代の少女たちが求めている冒険とスリルに富んだ推理小説の名作選集。少女たちが主役となつて探偵の役割をするのがこの選集の特色です」と明言するものも一つでもある。そして、この当初の意図は、以上の二つの少女探偵ものの冊数の多さを考えあわせれば、三十巻完結となつたときまでも「選集」の主調であつたと考えてよいだろう。

それを証するかのように、「選集」に後半で収録された「ジュディ」ものの『少女誘かい事件』(二二巻)解説で大倉宏之は、「いわゆるミステリーもの、スリラーもの」——海外の大人向けらしいが——への嫌悪を示す。登場人物たちが引きずられる悪の連鎖や血なまぐさい殺人などは現実にも起こりうるため、それに対処するたくましさや育てる意味で、ある程度は知らせる必要も認めてはいる。しかし、基本的に、「心がやわらかで感じやすい少女期に、あまりに挑発的な、あまりに強烈な刺激を受けることは、好ましいことではない」。サットン作品のように「少女小説、家庭小説としての要素」も十分に持つものこそ、望ましい「少女」向けの「推理小説」だというわけである。

紙数の都合で他の解説者の考えには深く立ち入らないが、ほぼ同様の立場から訳出作品を推奨している例が多い。つまり、まとめるならば、次のように言えるのではないか——そもそも推理小説は、英米など進んだ民主主義社会の産物であり、そこで生まれたもののうちさらに、十代半ばから後半の年齢にあたる、明朗快活、頭脳明晰な(アメリカの)少女の、いわば男顔負けの行動力で展開される、ほどよい刺激を持つ物語を抽出して日本の「少女」読者に提示することで、読後には彼女たちもまた、望ましい海外の少女たちのように、理的で、観察力、推理力、判断力に富んだよき市民となれる……という「読書」の理想がそこには存在する、と。

ところが、「選集」は右のような理念のもとに一貫しているだけでもない。たしかに多くの収録作品はそれに則つたものといえるが、そこに、一般のミステリー作品として著名な、そしてこの理念とは相反するような作品も、収録されている。それが、シリーズ中盤にかたまるように三点が収録された、ウールリッチまたはアイ

リッシュの作品である。このうち『深夜の追跡』と『まぼろしの女』についていえば、いずれも、主人公が罪を着せられたり着せられかけたりする中で、迫りくるいわば「締切」の時間までに真相が暴かれるかどうかを中心としたサスペンスである。前述の理念に即すわけではないが、読者が身を寄せて読み進めると考えられる主人公は潔白であるし、「血なまぐささ」が連続して出てくるわけでもない。その意味ではまだ、違和感は少ないといえよう。

だが『黒衣の花嫁』は、それらとは異なる。主人公の女性の連続殺人——しかも、なぜそれが行われるかの謎もある——がいかになされていくかが、展開の中心なのである。そして実は本作は、この「選集」以外にも、いくつかのジュニア向け叢書に訳出されてもいるのである。

そこで次に、この『黒衣の花嫁』の作者ウールリッチと日本への訳出状況を概観し、そこから『黒衣の花嫁』のジュニア向け訳書にしぼり、さらに「選集」収録の意味を考えてみることにしよう。

四

コーネル・ウールリッチ (Cornell Woolrich) は、別名ウィリアム・アイリッシュ (William Irish) としてもよく知られる (さらにジョージ・ホプリーの別名もある)。一九〇三年に生まれ、六八年に死去したアメリカの推理小説作家である。一九四〇年に刊行した『黒衣の花嫁』(The Bride Wore Black) 以降の「黒」のシリーズや、アイリッシュ名義の『幻の女』『暁の死線』などが長編の代表作であり、また短編も、ヒッチコックが映画化したことでもよく知られる「裏窓」など数多くの作品を発表している。

ウールリッチの活躍開始時期が第二次大戦中であったため、日本での紹介は戦後になる。長谷部史親は『欧米推理小説翻訳史』(本の雑誌社、一九九二)の「J・S・フレッチャー」の章で、「戦前に翻訳されるべくして翻訳されずにいた多くの作家の作品があり、ウールリッチ (アイリッシュ) やクレイグ・ライス、あるいはレイモンド・チャンドラーなど、翻訳推理小説の空白時代に新たに登場してきたアメリカ作家もいる。推理小説の翻訳出版が盛んになった昭和二十年代後半においては、まずそうしたギャップを埋めるのが急務」だったと概括をしている。たしかに、国立国会図書館のOPACなどで検索をしてみても、一九五〇年代から続々と、各

社から翻訳作品が出版され始める様子がよくわかる。その後も彼の作品は長く読み継がれ、現在でも早川書房や東京創元社の文庫に多数、収録されている。とくにサスペンスの名手として、歴史上に名を残している作家の一人といつてよい。

そんなウールリッチが、ジュニア向けの翻訳叢書で紹介された早い時期のものとしては、第二節でも名を挙げた講談社「少年少女世界探偵小説全集」に収録された第八巻『深夜の追跡』(内田庶訳、一九五七)がある。先ほどの長谷部の書によれば、この叢書監修者の江戸川乱歩は、「(引用者注・昭和二十年代半ば以降の状況について、アガサ・クリステイーのほか)この時期にカー、ウールリッチ、ライスを積極的に推輓した」(アガサ・クリステイーの章)という。確かに同叢書にはカーの『動く人形のなぞ』が第一巻として収録もされていて、一般向けのミステリー界で推奨していた作家たちを、ジュニア向けでも紹介していたことが証される。

内田が『深夜の追跡』と訳したのは、右のウールリッチ (アイリッシュ) 紹介で『暁の死線』とした作品であるが、これはその後も、内田訳『大時計は見ていた』(ジュニア世界ミステリー)五、ポプラ社、一九六八)、亀山竜樹訳『アリバイを追え』(ジュニア版 世界の推理)一六、集英社、一九七二)、藤原宰太郎訳『犯人をあげる』(世界の推理名作全集)一三、秋田書店、一九七三、のち「ジュニア版」となり一九八三)、内田訳『あかつきの追跡』(推理・探偵傑作シリーズ)二五、あかね書房、一九七六)と何人もの訳者の手により、さまざまなシリーズに収録された。「選集」では、野長瀬正夫が訳している。ちなみに「選集」でもう一作選ばれている伊藤訳『まぼろしの女』も、ほかに千代有三訳『まぼろしの証人』(世界探偵名作シリーズ)八、偕成社、一九六九)がある。

ほかにも現在一般に知られた訳題でいうと、『黒いアリバイ』『黒いカーテン』『夜は千の目を持つ』などの長編を含め、かなりバラエティに富んだ作品群が、次のようなジュニア向け叢書に一点から数点、訳出されている——「少年少女世界推理文学全集」(あかね書房)、「世界科学・探偵小説全集」(偕成社)、「ジュニア・ミステリ・ブックス」(盛光社)、「文研の名作ミステリー」(文研出版)、「世界の名探偵物語」(岩崎書店)、「少年SF・ミステリー文庫」↓「海外ミステリー傑作選」(国土社)。

その中で、『黒衣の花嫁』はというと、これも何人もの訳者を持つにいたった。次に判明している分をかかげてみよう。(刊年がカッコつきは初版未見)

・『黒衣の花嫁』 伊藤佐喜雄訳 「少女・世界推理名作選集」一四 (一九六三)

- ・『赤い花と死刑執行人・黒衣の少女』 矢野浩三郎訳 「ジュニア・ミステリ・ブックス」四 盛光社 一九六五
- ・『黒衣の花嫁』 武田武彦訳 「世界科学・探偵小説全集」二二 偕成社 一九六六

六
 ・『黒衣の花嫁』（作者名はここではアイリッシュ） 亀山龍樹訳 「文研の名作ミステリー」六 文研出版 一九七七

・『黒衣の花よめ』 平賀悦子訳 「春陽堂少年少女文庫」二〇〇四 春陽堂書店 一九七九

「選集」以外は版元も記載した。なお『赤い花と』は表題からわかる通り、二作併載である。偕成社の武田訳も、「死んだつめ」と「さらば、ニューヨーク」の二短編が併載されている。

このうち二点——矢野訳と武田訳——は、物語展開の短縮といったジュニア向け再話の常套手段がとられたばかりでなく、原作の設定からそれぞれ、目に付く改変を行っている。矢野訳は表題からもわかるように、新婚早々の夫の仇を討つ主人公の女性を、「兄」の仇を討つ「妹である少女」に置き換えた。他方、武田訳は、結末の主人公の成り行きが違う。偶然の勘違いから無駄な仇討ちで四人の人命を奪ったと知った主人公が、最後の殺人遂行を阻止した刑事に連行されていく原作に対し、武田訳では、自ら命を絶つ。いずれも、主人公の女性の設定、結末という、かなり根本的な点での改変がされているわけである。

一体、それはなぜなのか。実際の改変効果についての詳細な検討は、いずれ後日に帰すとして、とりあえず訳者たちが提示して見せる作品の概括から、この原因を探ってみよう。

矢野訳の場合、訳者自身の解説は付されていない。代わりに、後ろに関英雄「この本の読み方」が掲載されている。その中でも、主人公は「黒衣のむすめ」「少女」とはつきり記されており、おそらくは叢書企画の立場に立つ編集者ないし企画関与者の側で、「少女」への変更を決定したことがうかがえる。そこで関は、「見知らぬ黒衣のむすめに、つぎつぎと殺され、しかも殺される人間どうしには何のつながりもないように見える」と本作品の特徴を述べ、「結末近くなると、意外のあとに意外がつづ」く点を指摘し、さらに「孤独な少女の心の影が事件の上に落ちていて、独特のムードをつくつてい」とも言う。そのような「少女」の「兄」を思う純粋

さが事件の真相にあると知って、読者は胸打たれるというわけだが、実は、そこに改変の理由があるのだろう。原作では、恋人が何か後ろ暗い仕事に手を染めていることに、主人公は気づいていた。ただ、彼にその状態から抜けてほしいと願い、それでいて犯罪集団から足を洗うことの難しさを知らなかった点で、彼女は純粋さを象徴しているのだった。矢野訳は、男女の付き合いそのものを回避し、さらに主人公と犯罪の関係を絶縁させたところから、出発している。

武田訳の偕成社の本は、冒頭に「この物語について」が置かれ、後ろに「解説 原作者と作品について」が載せられている。「この物語について」では端的に物語の進行を予告しているのだが、その中で次のように武田は言う。「しかし、その黒衣の女にも、だれにも話せない、きよらかな愛の悲しみがあつたのです。」その秘密追及の、捜査官側の焦燥感が、「追いつめられていく犯人の恐怖」とともに「いしれぬ不安」を読者の胸に感じさせ、魅了する、と続ける。さらに「解説」では、「ウールリッチの小説はなによりも都会的なセンスと、ものさびしいムードがあつて、強烈なサスペンスと、花のようなあまいなみだが、よむ人の胸をしつとりとぬらす」と述べる。

実は武田訳では、主人公のジュリーは、結婚相手が「ある暴力団の手先」で「麻薬の売人」だったことを知らなかった。そして、彼女の結婚自体、ひよつとしたら彼が逃亡のために決意したものだったかもしれないと刑事は匂わせる。そうした背景を知らされてすぐに、彼女は、突然、舌を飲んで絶命してしまうのである。結末の一文は、「黒衣の花嫁を乗せた黒ぬりの自動車は、きらめく星の下を、ニューヨーク市内へ、まもなくはいろうとしている。……」とあり、やるせないたましさを余韻として残す。ここでは、彼女自身はもともと、純な気持ちで結婚に夢を抱いたのであり、そもそも夫も犯罪者であつたし、自分の誤解から幾人もの命を奪つたと気づくや否や、潔く自死を選ぶ。そこに、矢野訳とは違ったかたちながらやはり純粋さが際立たされていることは明らかである。

亀山訳、平賀訳にはそうした改変は見られない。それでも、亀山は「解説」で（はじめから）女はかなしみのかけを負っている」「やさしい心の持ち主」といい、アイリッシュ作品の特徴として「すぐれた手法と描写力を使って、恐怖とサスペンスをもちあげ、人間の孤独、わびしさをにじませ、ただのトリックじたてでは作者が満足しないところ」をあげている。平賀の「解説」は、これがオムニバス形式であ

ることを指摘するが、もっぱら「サスペンス推理小説」であることに主眼を置いたものとなっていて、結末に關しても、「そんな不安やおそろしさが最高潮になったところで、思いがけない結末が待っている」というのみで、主人公をめぐる情緒的な色付けの少ないものとなっている。

では、「選集」の伊藤訳の場合は、どのような紹介の仕方なのか。伊藤は「解説」で、「なぞときの興味、サスペンス、意外性など、推理小説の骨法をみごとにそなえてい」る点をまず挙げ、さらに筋に沿って、「とくに三人めのモーションごろしの話がおもしろい」（傍線引用者）などと評する。結末に關しては「（ジュリーは）復讐がすべて、むだであったことを知るが、そのときの彼女の悲劇的な姿は、人間のあわれさに通じるようなものがある」と言う。さらに「たくみな描写のすみずみにも、何か甘やかな、ものさびしい哀感がながれて」と指摘し、「女性の読者をひきつけるのも、その点にある」と推測する。すなわち伊藤は、連続殺人が行われる小説の筋の展開を、「おもしろさ」という面で捉えるが、同時に、そこにある「女性」に結び付けられた「哀感」を重視しているのである。

本作品が、連続殺人という本来血なまぐさい出来事を中心に行っているにもかかわらず五人のジュニア向け訳者を持つにいたったのは、女性主人公に「純粹さ」「哀感」を強く結晶させる作品と考えられたためではなかったか。企画者や訳者が時に改変まで施しつつ紹介しているのは、何らかの「読書」の利点追求をはかるに際しても、そうした「女性」主人公の姿はジュニア読者に十分提示するに値する、との判断がされたと考えられる。

この傍証となるような発言が、ウールリッチ『魔ひよりの恐怖』（原作は『黒いアリバイ』、『世界探偵名作シリーズ』一一、偕成社、一九七〇）の訳者青山光二の「解説 原作者と作品について」に見られる。青山はそこでウールリッチの長編作法——ヴァラエティに富んだエピソードの積み重ね——の例として『黒衣の花嫁』をあげ、「このような残酷な話が、ウールリッチ独特のあまいムードによって、高い効果を生んでいる。」と指摘する。さらに登場する女性について「やさしく美しく、しかも献身的な女性ばかり」だとし、作品の「あと味がわるくない」のは、「登場人物の行動が献身の感情を基盤としているからにちがいない」とする。ジュリーも、「殺された恋人への献身の感情から」連続殺人を犯したというわけである。

先に見た改変された『黒衣の花嫁』二点も、青山の指摘するような方向をより強

めたものと考えられるだろう。そして他の訳出作品についても、訳者の意識等からうかがえる限りでは、やはり、「女性」にまつわる「哀感」の向こうに、「献身」と呼ぶべきものを見ていたのではないか。

そうすると、「選集」の場合に、シリーズ中盤でかためてウールリッチ（アイリッシュ）の三作品が収録された理由も少し推測できそうである。すなわち、「世界」と銘打っている中に多少、一般向けの作品を収録したいが、他の一般向け著名推理小説——たとえば本格ものなど——はより血なまぐさい、サスペンスならまだしもだ、との意識が存した、そしてそのとき、ウールリッチが一般向け作家を代表して選ばれ、とくに彼の代表作を収録することとなった。そもそも彼の作品群は、許容される「あまやかさ」「ものがなしさ」を漂わせていたから——ということではな

いか。アイリッシュ名義の二点は無論、血なまぐさいの難点はない。そして『黒衣の花嫁』も、右に見たような流れの一環としてなら、企画者も受容しえたのだろう。こうして、「行動的な少女主人公」が大半を占める「選集」の中に、ウールリッチ作品は、なかならず『黒衣の花嫁』は、いわばその裏側の、「女性」の影をあらわすものとして、位置を得たのである。

五

一九五〇年代後半から七〇年代にかけての、「選集」をはじめ翻訳推理叢書が数多く刊行された時期は、日本の創作の分野においても現代児童文学の出版・展開期にあたり、翻訳の分野でも、新しい作品群が多数、完訳され世に送り出される時期と重なる。良心的ないし芸術的とされる創作・翻訳群の普及が図られる中で、児童文学の理念として「向日性」や「理想主義」が尊重されたことはよく知られている。日のあたるそうした作品の「読書」に伍して出版が進められるときには、娯楽ものややや低く見られがちな読み物ジャンルもまた、子ども読者にモデル提示をしていく方向で作品の選定がされ、直接的なメッセージとしてそれらの「読書」の効用を説くことが、否応なく求められたのだろう。

「選集」はそのとき、「少女」対象に限定して企画された。日本の一九五〇年代に、たとえば偕成社やポプラ社から刊行されていた「探偵もの」が纏わりつかせていたおどろおどろしさや血なまぐさい——同じ「黒衣」の語を題名に持つ高木彬光『黒衣の魔女』（偕成社、一九五四）や柴田鍊三郎『黒衣の怪人』（ポプラ社、一九五四）

などが表紙絵からして發揮している——を切り捨て、論理・推理・判断力育成と行動的なアメリカ型少女の提示を結びつけたとき、「読み物」ジャンルの持ちがちないかがわしさを払拭し、積極的に推進しうる「読書」の格好の素材が、そこに誕生したのである。ただしそのなかには、純粹さゆえに男への愛を貫こうとして、それが無残な行為を生んだばかりでなく、さらに復讐にもならず全くの無駄という結果にいたる、「献身ゆえの哀れさ」という女性像をすべりこませて。

当時の読者たちは、この叢書をどのように受け止め、記憶にとどめているのだろうか。たとえば「復刊ドットコム」(www.fukkan.com)を検索してみると、この「選集」についてのコメントが一九件寄せられている(二〇〇六年八月一九日時点)。そこでは、小学生のころに夢中になったという思い出が見られるが、ナンシーやジュディのシリーズとあわせて『黒衣の花嫁』があげられてもいる。先に述べたように、同じ叢書が提示する物語や人物像として、抵抗なく受け入れた様子がわかる。そんな中で一番目立つのは、かつての装丁のままの復刊を望む声の多さである。

金の星社では、「選集」収録作の中から、一九九八年から九九九年にかけてナンシー・リーズのうち六冊を、二〇〇〇年から二〇〇二年にかけてジュディ・シリーズのうち六冊を、フォア文庫に収録、刊行している(一部訳題の変更がある)。その際大きく変わったのは、表紙絵・挿絵である。前者は美似原由吏、後者は山下以登が担当しているが、タッチは違うものいずれもコミック風の絵となった。それに対し、復刊を望むかつての読者たちは、関連するコメント部分を抜き出してみると、「あのステキな表紙」「あの装丁のまま」「ぜひとも以前のままで」「挿絵やそれぞれの作品のタイトルも味があって」「(注・文庫版は)挿絵などが漫画っぽくなっていて(略)買ったことを後悔」「挿絵も渋くて、子供扱いしてなくてよかった」「挿絵も本格的(子どもっぽくない)だったこともあり、読み応えがあって」「などと、「選集」の装丁を一様に強く支持する。ここから窺えるのは、「大人の雰囲気」を提供してくれた書籍へのかつての憧憬とその後の愛着である。翻訳推理叢書の発行者側の思惑とは別に、当時の読者たちが、ある種のモデル——おとなっぽさを持ち合わせた「少女」——イメージをそこに感じていたことは確かだろう。

その一方で、ジュニア向けの推理小説ジャンルはどのように推移したのだろうか。一ついえるのは、かつて隆盛であった翻訳叢書が減少した点である。調査した限りでは、単行本の叢書は、一九九〇年代以降に刊行されたのは「海外SFミステリー

傑作選」(国士社、一九九五)のみで、これも実際には八二年刊の「少年SF・ミステリー文庫」の後身にすぎない。代わりに、講談社青い鳥文庫での創作書き下ろしによるミステリーのシリーズが、隆盛である。はやみねかおるの「名探偵夢水清志郎事件ノート」シリーズや松原秀行「パソコン通信探偵団事件ノート」シリーズなど、虚構ながらより身近な設定の作品群が人気を博している。

さらに青い鳥文庫には、新しい動きもある。今や一般向けエンターテインメントを代表する作家の一人となった宮部みゆきの既刊作品のうち、『ステップファザー・ステップ』(親版は講談社、一九九三)が二〇〇五年一〇月に、『今夜は眠れない』(親版は中央公論社、一九九六)が二〇〇六年三月に収録されたのである。後者の北上次郎による「解説」の中では、「小説」一般の特徴としてさまざまに人生とドラマがあることをあげ、「たくさんの経験を積むことが、将来の君の人生に大いに役立つことと信じ」と述べる。しかしこれは、現在の全体的な「読書離れ」現象を受けたものであり、「推理小説」ならではの「読書」の効用を説論する姿勢とは程遠い。むしろ前者のカバー裏表紙に「ドキドキ、ワクワク、笑って泣いて、最後はほろり。ユーモアミステリーのロングセラーにして大傑作!」の文字が躍るように、とにかく子ども読者を惹きつけることが至上命題となっているように感じられる。

青い鳥文庫の発行元である講談社が、二〇〇三年七月から刊行を開始した単行本の「ミステリー・ランド」シリーズの存在も念頭に置くと、かつてとは違ったかたちで、何らかの「読書」への動機付けが「ミステリー」ジャンルに期待されているのかもしれない。一方で、金の星社のナンシーやジュディのシリーズが生きながらえていることを考えると、かつての「少女」モデルの、今日における意味づけの変化の有無をも考える必要がある。こうした現在につながる課題を見出したところで、本稿を終えることとしたい。

*本稿は平成十八年度科学研究費補助金基盤研究(C)「少女」向け名作再話の成立と展開——児童文学における翻訳叢書とジェンダー意識」に基づく研究の一環である。

*本稿の骨子は、日本児童文学学会第四五回研究大会(於・都留文科大学、二〇〇六年十一月十一日(土))において、発表した。